

## 卷 頭 言

# 大 正 池 考

白 石 直 典\*

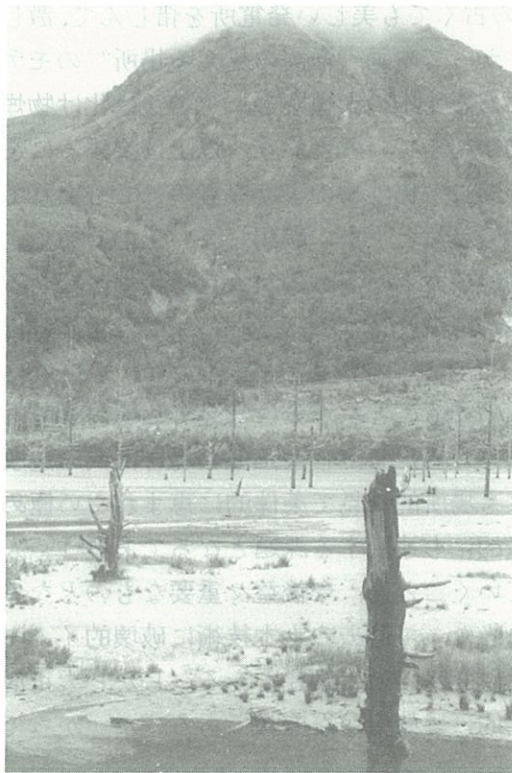
環境を考える場合、常に問題となるのが“開発か環境保全か”ということである。「上高地にある大正池は、大正年間に焼岳の噴火によって梓川がせきとめられて出来た池で、神秘的な美しさとして有名である。一方、この少し下流では、この池水を利用して水力発電も行われている。しかし近年、上流からの土砂の流れこみによって池が極度に浅くなり、早晚陸地になろうとしている。そこでこの土砂を除くことが計画されたところ、自然保護団体がこの計画に難色を示してきたという。」この話には種々の問題が含まれている。大正池は自然災害によって生まれたが、年月が経つにしたがって、何時の間にか独特な美しい日本の代表的な景観を呈すようになったのである。このように、年月の違いこそあれ、同様な過程を辿って現在美しい景観を示すようになった例は他にも多い。スイスで聞いた話であるが、ある湖のほとりに古い発電所があり、これが最近では非効率となったので新しく建て替えようと計画されたところ、この古くても美しい発電所を惜しんで、激しい反対の声が起こっているという。また、かつて映画“煙突の見える場所”のモデルとなり、近年は無用となった東京千住にある4本の大煙突も、その後は化け物煙突と嫌われていたのに、最近では保存運動が起きているという。以上は要するに新しい間はなじみ難いが、古くなると何時の間にか化け物のようなものにでも慣れてくるということである。こうして人工の物も自然とうまく調和していくのである。これをみると、人と景観との間には、時間的要素というものが大きく作用しているように考えられる。

さて、先述の大正池が消滅しそうであるということ思い出されるのが、寺田寅彦博士の全集の中の一文である。ダムというものは、いずれは上流からの土砂の流出によって容積が小さくなることを十分に考えておくべきであることを、1930年代の初めにすでに警告している。しかし大正池の場合は人工造成のダムではないが、ここで土砂を除こうにも場所的に見て条件的に恵まれない極めて困難な問題があり、かつその悪条件は将来的にも連続する課題となるであろう。人が環境を補修しまた再生しそして創造していくことは、今後益々重要なものとなることに疑いの余地はない。その土木工事に当たって過去の土木技術に破壊的イメージがあったとしたら、これを創造的土木技術に変えていく必要もある。しかし大正池の消滅を防ごうという話ともなると、現実的には如何がなものであろうか。かつてその美しさに魅かれ

\* 当協会理事、技術部長 工学博士

て数回となく訪れた上高地ではあり、惜別の念が深いものがあるが、素人の判断としても、元に復しそれを今後とも維持していくのは難しいのではあるまいか。

さて、本文の初めの「 」内は、筆者がつくった文章であるが、これをある大学の工学部4年生の2学科約70名の学生に与えて、読後の感想を800字以内を書いてもらった（共通一次元年の学生であり、文章もみたかった。なお大正池に行ったことのある学生が多い）。以下に集まった文章の主旨を要約すると、1)自然保護団体は無責任である……3%。2)とにかく土砂を積極的に除くべし……9%。3)方法及び対策等をよく考えた上で土砂を除く……35%。4)水力発電保護のために土砂を除く……3%。5)いずれの場合についてもその得失をよく考え、かつアセスメントを行って結論を求める……17%。6)自然は自然のサイクルに任せるべきである……12%。7)自然に手を加えてはいけない……8%。8)焦点のあいまいな空論……13%。であった。さて、3)については、若い技術者の卵としての意気込みと迫力にうたれ、5)では大人びた安定感を思わせ、6)では信仰の境地を味わせる名文もみられた。以上の3)5)6)を合わせた64%これが工学部学生の平均像であろうとみた。とかく筆者も3)と5)を合わせた考えになじみ易いが、実は前述のようにすでに挽歌を捧げてしまったのは、やはり少し年をとったせいであろうか。学生達が意外にもしっかりしていることにまずは安心した次第である。



埋まった大正池（1972年）